

春燈

2 月号

February 2011



主宰の句

安立公彦

かにかくに京の灯恋し紅燈忌

見たく来し吉原の月一の酉

寒暁や下総みちの鐘のこゑ

生姜酒遠山窓を退りゆく

菊坂にしぐれ華やぐ一葉忌



煮大根を煮かへす孤獨地獄なれ

『流寓抄以後』昭和三十四年

小説『三の酉』の、おさわとぼく（万太郎）の会話に
「…人間の一生なんてものは、はじめツから、さういう
風にしくんであるんだ…」掲句はこの線上にある。『あは
れ』に他ならない。晩年、長男耕一に先立たれ、妻きみ
との別居の頃の作。煮かへしているのは火鉢の上である
う。独自の技巧のあともなく究極の人生流浪の独白。こ
の三年後、最愛の三隅一子のあとを追うように急逝。

西川保子

久保田万太郎の句

あはゆきのつもるつもりや砂の上

『流寓抄』昭和二十一年

うす墨のにじみをきかせた一枚の絵。ものに触れれば消えてしまう「あはゆき」、その「あはゆき」が藁にも縋ろうとの思いで砂の上に降り続く。何か想いをつなぐような果敢なさが心に沁みる。

古来、日本文学の根底にある「もののはれ」ということを「あはゆき」の季語に命を授けて見事に磨き上げられた芸の深みを感じさせる一句。

小張 志げ

燈下集



○ 片桐てい女

糸びす講に買ふが習ひのみすや針

石榴裂け戸締りはせぬ杣の軒

鴨鳴くや波郷知る者みな老いて

いつも兄に従いて回つて青写真

喧嘩独楽受けに回れば敗れけり

○ 渡辺鶴来

腹中にできもの育つ神の留守

入院や冬の歳時記携へて

石路の花すでに終りや外泊す

患者食あまさず食べて雪ふらす

ちちんぷいぷい病気など飛んでけ玉霰

○ 西川保子

ひそひそと薄日をあつめ冬桜

近衛邸跡翳りそめたる冬紅葉

神域の桂落葉の香なりけり

くれなゐの溢るる花舗や憂国忌

畳かく褪せて親しき冬座敷

○ 鈴木榮子

羽子板市むかし新門辰五郎

吸入器高さ調節父のあと

たうたうお眼に掛れず極月逝かしめし

吉原祭に顔出し時雨の道帰り

マスクして子供心にひげめあり

○ 富山俊雄

三方に載りて二股大根かな
山畑のぞれぞれ畔や冬苺
丹念に新聞を見る冬の蠅
色即是空空即是色日向ぼこ
綿虫に少し風出てきたりけり

○ 上山永晃

木の実いろいろかくもかがやく命かな
雁の天その名に恥ぢず真青なり
大綿の回向の舞ひと思はずや
不退転問はれてゐたる竜の玉
短日の文に一撃食らひけり

○ 佐藤信子

葱一本買ひ足す用をふやしけり
信じたき風の噂や帰り花
焼芋屋けふも来てをり二の鳥居
みささぎに日を傾けてかいつぶり
短日や門錆びし不浄門

○ 本多游子

畑分かつ小さき流れや冬銀河
ブロンズの指さすかなた寒の月
あさにけに見てゐる山の眠りけり
雀去りその後猫来る漱石忌
み仏のてのひら厚く冬深む

○ 山内四郎

小春日や川にこぼるる橋の影
数珠玉の数珠の数個をポケットに
冬めくと思へば椅子の軋みけり
雲を出し冬日一郷照らしけり
冬晴や瀬戸に魚島四阪島

○ 竹内慶子

霧ごめの城址声なき声聞こゆ(岩村勉強会三句)
青年に夢ありしころ楷紅葉
藍の花旅のなさけの身に沁むる
冬めくや京に遣れる蝦夷の碑
つつましく生きて明るし枇杷の花

春燈賞

清水 美子

片山 博介

第39回春燈賞に決定します。

平成二十三年一月

春燈俳句会

安立公彦

当月集

安立 公彦選



○ 冬座敷漆の貝の釘隠

本陣の厨に眠る火消壺

懐手解体新書腑分の史(小塚原回向院)

子育ての絵馬を射抜ける冬日の矢(素戔雄神社二句)

神天降る瑞光石や神の留守

○ 清水美子

○ 宮沢治子

神留守の塗り替へらるる朱の手摺

数へ日やありて使はぬ勝手口

余所見して人にぶつかる街師走

色鳥や襟に名入りの豆剣士

新走り三和土の隅に火消壺

○ 府川昭子

熟柿吸ふや小鳥の気分になりきつて

気儘なる身に余りたる小春かな

独り言ひとり眩き冬に入る

日の影のささくれだてる花八つ手

海原に島の彷徨冬来る

○ 片山博介

冬構伊吹の神ををろがみて

初版本ナイフで開く漱石忌

冬落暉妻に秘めたるわが美学

鎌鼬敵を作らぬ男など

雪の夜は李白と酒に酔ふばかり

○ 永島雅子

しぐるるや変身了る美容室

富士見てふ町の浮世絵しぐれをり

町の名に遺る銀山冬紅葉(奥只見二句)

銀の間府眠らす山の眠りけり

ロープウェーの昇る山頂雪と言ふ

春燈の句

安立 公彦選

冬三日月沖波つついに海石嚙む

千葉 神田 恵琳

冬もみぢ人の絶えざる火伏神

暮残る空に三日月一葉忌

星屑を風の置きゆく十二月

父はるか鶴嘴で墓掘りし冬

ぼる市の尺八つつむ黄八丈

狂ひ咲くそぶりのままの躑躅かな

生き抜くと十年日記求めけり

広島 平 絵美子

恩讐はすべて帳消し冬の葬

ひとたびは水尾の分れて番鴨

葬終へてやがてつめたき冬の雨

風花を追ふや千曲のはぐれ鳶

熱爛や昔手塩と言ふ小皿

朝市に買ひし白菜横抱きに

いく度の母の祥月霜の菊

東京 小島 昭夫

炉語りの訛に眠気兆しけり

父母の忌のはらから集ふ冬座敷

終了の笛にラガーら跪く

冬座敷軸の達磨に見据ゑられ

箱枕の一对置かれ白襖(小原信本陣)

山はいつも遠き日を呼ぶ冬紅葉

伯耆富士見ゆる朝市松葉蟹

千葉 中村紀美子

冬めきて母に手渡す蒸しタオル

母と子の喋り疲れし炬燵かな

冬めきて母に手渡す蒸しタオル

熱つ熱つの釜あげ鯉飴隅の席

冬めきて母に手渡す蒸しタオル

落葉掃く箒に戯れる子犬かな

冬めきて母に手渡す蒸しタオル

結婚記念日忘れてゐたる葱鮎鍋

東京 豊谷ゆき江

兵庫 伊藤 百江

長野 木内 博一



余言

安立公彦

まだ残る夢のかげらや穴惑

高橋 和女

季語の中には時として意表をつくものもある。「穴惑」もその一つ。この言葉から蛇を連想するのは、俳句を知らない人には無理だろう。時期が来ても穴に入らず徘徊しているその蛇を、作者は「まだ残る夢のかげらや」と、同情をもつて詠む。それはまた作者の「夢のかげら」であるかも知れない。充分に練り上げられた句である。

和昭なき浪花の空や冬桜

和田 孝村

中島和昭さんが逝かれたのは二月二十四日だった。その訃報を西川保子さんから聞きながら、私は大きな喪失感を味わうばかりだった。例えて言えば航行上のレーダーを見失った思いだった。

「和昭なき浪花の空」を、しかし残された西川保子・松本峰春、和田孝村、乗鞍三彦の皆さんを中心に関西の春燈人は良く守り抜いて来られた。「冬桜」はやがて爛漫とした春を呼ぶ。新たな「俳句の花」の開花を期待したい。

人影に鯉の重なる小春かな

太田 慶子

一見何気ない句のように見えるが、丁寧に写生を積み上げた句である。公園の池の傍。作者が立つと池波を分けて幾匹かの鯉が寄る。折からの小春の日差しを受けて、池の鯉もまた作者も、「人影」にしばしの刻を過ごす。

ひそひそと薄日をあつめ冬桜

西川 保子

「冬桜」の特長を遍く備えた句である。冬咲く桜には華やかさも豪華さも無い。しかし作者はその冬桜を、「ひそひそと薄日をあつめ」と擬人化し、薄日と冬桜の交流を、好意的にそして的確に表現している。

近くに四、五本冬桜の咲く川辺がある。何となく見過して来たが、今年はしっかりとその花を愛でよう。

〈引き合うて引き立て合うて紅葉つれり〉の句もよく見て作つてある。改めて写生の大切さを感じる。

夫の星いまどの辺り冬銀河 中島 節子

はるか昔、冬の星座は天界の華燭とも言うべき盛観さに満ちていた。オリオン、昴、カシオペア、北極星、それらの星は、仰ぎ見る少女の瞳にしつかりと映つた。

作者はいま、過ぎし日に見たそれらの星群の中に、今は亡き「夫の星」を辿っている。そのご主人が亡くなつたのは今年の八月だつた。喪中の挨拶状で知つた。しかし「夫の星は、今もこの後も、しつかりと作者を見守っているであらう。

野良猫の耳のうすさや寒早 江草 礼

「冬至冬なか冬はじめ」の言い習わしもある様に、本格的な「冬旱」の訪れは冬至以後である。

その「冬旱」に、作者は「野良猫の耳のうすさ」を配した。なかなか思い浮かぶ言葉ではない。

世に十人十色と言つが、俳句の表現はまさに人の顔の違いほど異なる。作者は常に「表現」に思いを巡らせているのである。そういう熱心さから生まれた一句である。

どこまでも高き空ある花野かな 岩永はるみ

（祝『花野』）の前書きがある。この九月、ふらんす堂から出版された、鷹崎由未子さんの句集『花野』への祝句である。句集名はこの句集の悼尾を飾る、へまだ夫の攫ひにはこぬ花

野かなぐによる。』どこまでも高き空ある」は由未子さんの句とみごとに照応する。

挨拶句は俳人にとつて大事な詠法の一つである。それはころにゆとりがなくては出来ない。同時に相手を称美する思いがなくては出来ない。この句その双方に通う。

神留守の塗り替へらるる朱の手摺 宮沢 治子

この季語も俳諧的である。陰曆十月、日本の神々は出雲天社に集う。神の談合である。

神が出雲に発つたあと、かねて懸案だつた社の高欄を塗り替へようと言つのである。神が社に居ては、神に背を向けることになる。それは忌むべきことだ。

この句にはそこはかとな滑稽味が漂う。それは俳句が本来持つ「俳諧」の大事な要素の一つである。

しぐるるや変身了る美容室 永島 雅子

女性にとつて美容室は変身の間である。その変身の過程がどういふものか男どもには分からない。しかし美容院から帰つて来た女性の顔には、一つの特徴がありありと伺われる。それは「輝き」である。女性は単に髪を整えるためだけに美容室に行つてゐるのではない。輝きを得るために美容室に行くのだ。

この句の「変身了る」には何かしらのユーモアが感じられる。それは「輝き」と共に大事な生活の活力である。